

- 1 朝顔や 色形生命 我に在り
- 2 春風や 仏の言葉も 朽ちにけり
- 3 雪解けの 並びし骸に 母もをり
- 4 挨拶や 心が瞳と なれる時
- 5 堆積する 硝子の如く 思ひ出流る
- 6 我等の上に 苦しみ雨の やうに降る
- 7 試験捨て 過ごす出離の 時間かな
- 8 いとほしく おもふものかな 人間は
- 9 母は子に くちづけをせり 冬の路
- 10 木蓮や 手に春の陽を 残しけり
- 11 女兒たちの 王国と化す 駅ホーム
- 12 春嵐去り 雲は天使の 如く冴え
- 13 娘等の タイツの下からも 爪輝く
- 14 街の灯が 線路二本を 光らしむ
- 15 夜は冴えて 電車物理を 滾らせる
- 16 白日は 我を咎めず 冬櫛
- 17 廃墟にも 金木犀の 香が満ちる
- 18 夜風冷たし 空には裸婦の 如き月
- 19 菜の花に 女の口唇（くち）を 思ひ出す
- 20 冬暮れや 色は数へぬ ものと知る
- 21 いっしかは 水魚とならむ 秋と人
- 22 石垣の 苔が夕陽に 光りけり
- 23 朝の陽に 子らの帽子が 光りけり
- 24 亡き母の 化粧の如き 御空かな
- 25 永遠に 子の眼に映る 白き蟬
- 26 蝶々に 名を名乗りたる 子供かな
- 27 梅雨なりし 昔の女 美しき
- 28 故郷の 稲ただ青く ただ青く
- 29 紫陽花が 電車の轟音 聞いてゐる
- 30 盲人の 杖の音して 夏の夜
- 31 叱らるる 盗人の眼の かなしきや
- 32 自転車の 行末知らず 夏の風
- 33 静けさや ごみの散らばる 朝の駅
- 34 哀歌さへ 温くなりゆく 夏夜かな
- 35 夏風に 二匹で挑む 蜻蛉かな
- 36 熊蟬の 亡骸が眼に 透きとほり
- 37 林檎齧る 昔も今も 我なりし
- 38 雷光が 朝の人等を 照らしけり
- 39 今宵また 黒人の脚 燦めきぬ
- 40 朝顔が 少年時代のごとく 濡れ
- 41 木洩れ日を 銃弾のごとく 人は浴び
- 42 銀行の 上より雄鳩 見下ろしぬ
- 43 夕陽の中 樹々は滅びて ゆきにけり
- 44 蠅の眼に 荒野を走る 男あり
- 45 乾きし雷鳴 老いゆく母の 横顔に
- 46 生死みな 懐かしきかな 曼珠沙華
- 47 子が笑ふ 開いた雲に 似たるなり
- 48 昼寝する 老犬の顔 歪みけり
- 49 梅雨来る 赤児の指を 見つめをり
- 50 ゴスペルの 叫びのごとく 夏の雨

特別賞  
稲田進一 (010)

第4回芝不器男俳句新人賞 応募作品  
※無断での転載・二次配布を禁じます  
芝不器男俳句新人賞実行委員会

- 51 自由とは 孤独に見やる 夏の星  
52 電車灯 白く夜道を 掃くごとし  
53 病みし眼に 光溢るる 夏の街  
54 綿虫が 生まれ滅びて ゆきにけり  
55 冷たくて 我透き通る 夏の青  
56 秋雨や 人の心の 音も消し  
57 雨の日の 子らの祝杯 放り傘  
58 暮れ際に 薄三日月の もの想ふ  
59 電車待つ 少女の祈りを 我は見し  
60 秋更けて 紫空に一機 橙を受け  
61 電車の明かり 清流に見えたり 秋の道  
62 雲潮や 忘れし日々のごとき白  
63 紫秋落つ 影なる街に マリアの 声響く  
64 朋来たる 自由の風と 共に去る  
65 許したか 許されたのか 冬の夜  
66 冬空や 星少年の 慈悲のやう  
67 冬月や 真実も嘘も なかりけり  
68 我消えて 珈琲の苦み だけ残る  
69 冷たき風が 子供の髪を 揺らしけり  
70 雑草が 蟻の如くに 輝けり  
71 工事あり 自販機たち どころに 消える  
72 都会に蝶 空の青さに 消え入りぬ  
73 ハロウィンや 死者は笑顔で 蘇り  
74 駄々っ子を ひきづることく 油蟬  
75 暦とは この細胞の ことだらう  
76 友人の 結婚式だ 朝の海  
77 椅子の 曲線を 愛と呼んでも いいだらう  
78 名月や 今亡き人に 逢ふごとく  
79 二羽の鳩 日陰で 愛しあひにけり  
80 朝日の中 きらりと 鴉の 羽光る  
81 夏も過ぐ 蝉裏返り 命抱きて  
82 病み人の 声も響かん 冬日和  
83 元日や ひとの 家族を 見る日かな  
84 生きやうと 執我脱ぎ捨つ 冬の夜  
85 木洩れ日に 成熟の 闇ありにけり  
86 街の樹々 風のリズムを 刻みけり  
87 冬陽差し みなやはらかき 影となり  
88 朝顔の 葉や幼き日に 見しかたち  
89 奥空や 子の憧れの ごととき青  
90 母見つめ 破れ傘 差す 女の子  
91 昼寝して 五月雨を 我が思ひとす  
92 祈る如く 教ふる如く 夏墓在り  
93 秋灰白 百葉いのちの 語を吐きぬ  
94 日は落ちて 肺腑が青に 染まりゆく  
95 手の触れし 葉の冷たさが 愛しかり  
96 冬の日や 選挙の顔も 微睡みぬ  
97 夏の夜の 路傍の緑 恐ろしき  
98 悲しみは 限りなきもの 桜満つ  
99 東京で 東京恋し 裕次郎  
100 手をひろげ 月光待ちぬ 緑の葉